

(続紙 1)

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	西尾 善太
論文題目	分断都市マニラにおける「公共性」の地層 —生活インフラストラクチャーとしてのジープニー—		
(論文内容の要旨)			
<p>西尾氏の博士論文は、フィリピンの首都圏マニラにおける乗合自動車ジープニーに着目し、ジープニーの持つ公共性について、歴史分析とフィールドワークを通じて明らかにした。既存研究の多くが、首都圏マニラにおける顕著な空間的・言語的・歴史的な分断、そして、公共性の喪失を指摘してきたのに対して、本博士論文は、ジープニーとジープニーを取り巻く人々の関係から浮かび上がる公共性を明らかにしようとした意欲的な博士論文である。</p> <p>章構成は以下の通りである。まず、序論において上述の博士論文の問題意識と論点を明らかにしている。第1章では、歴史的にマニラ社会が貧困層と中間層、大衆と市民という形で空間的・言語的に分断されてきており、それが1990年代以降の新自由主義的改革で加速化したことを指摘した。先行研究がこの分断に焦点を当てすぎてマニラにおける公共性の喪失を嘆き、その打開策として親密圏といった共同体的秩序を提示する点を批判的に検討した。そのうえで、国家の統治能力の低さもあり、近代的公共交通機関としての鉄道などが機能不全に陥りがちなのに対して、第二次世界大戦後に連合軍が払い下げたジープを改良した乗合自動車ジープニーこそが公共交通機関として機能しているとした。</p> <p>第2章では、アメリカの植民地時代に始まるマニラの交通インフラストラクチャーの歴史に触れた後、第二次世界大戦後にジープニーが普及してきた流れをフィリピンの社会政治変容の中に位置づけて論じている。続く第3章では、ジープニーの所有者と運転手間の車両賃貸契約であるバウンダリーとバウンダリーが生み出す社会関係を明らかにしている。パトロン・クライアント関係が実態としても新自由主義的社会の処方箋としても提示されるフィリピン社会にあって、ジープニー所有者と運転手の間に見られるバウンダリーという契約形態は、両者間の水平的関係を生み出しており、ジープニーを取り巻く社会関係を融通無碍なものとし、明確な組織化、制度化を阻んでいること、だからこそ、ジープニーが現在に至るまで公共交通機関としての役割を果たしているとする。</p> <p>第4章では、ジープニーが所有者と運転手だけでなく、修理工など多様で広がりのある人間関係によって日常的にメンテナンスされることで公共交通機関としての機能を果たしている点をフィールドワークに基づいて明らかにしている。その際、ジープニーを取り巻く社会経済関係をフィリピン語でメンテナンスを意味するアラガというキーワードを軸にして分析していることに特長と新規性がある。</p>			

第5章は、ジープニーの所有者や運転手が近代的車両と運行スタイルの導入を図る政府の事業に反対して実施したストライキを参与観察で分析している。デモ参加者数そのものは少ないにもかかわらず、ストライキは第3章と第4章で描いたジープニーを取り巻く社会関係が動員される形で実施されたことからマニラの日常生活を混乱させることに成功した。そこから、人々にジープニーの持つ公共性を再認識させることに成功したとする。

終章では、6つの章をまとめた後、ジープニーの所有者や運転手の作り上げる社会関係は彼らだけに閉ざされておらず、IT時代の経済モデルである配車アプリのドライバーなどとの連帯の動きも見せており、その点でジープニーが生み出す公共性は開かれており、新自由主義時代のなかで個人を社会につなぎとめる可能性を指摘して終えている。